





写真1: (イメージで)「あら、何かしら・・・？」

勝田先生の温かな眼差し。ルーカス先生との深い絆と、「きっと喜んでくださるわ」という確信が伝わります。(この場にいた私たちも、このお碗の意味を牧野さんから伺って十分知っていましたので、皆同じ気持ちだったと思います)

2: (これまたイメージ)「まあ、素敵！」

まさに心から喜んでくださっているルーカス先生の笑顔。純真な少女そのものに思いました。

3: 輪島塗のお碗のエピソードを説明するT.M.さん

ルーカス先生の真剣な表情。先生の「このお碗の意味を是非とも知りたい！」という、強い思いを感じました。

4: 「このお碗の中には、既に今日の皆さんとの楽しい思い出がたくさん入っています」とルーカス先生はおっしゃいました。

「思い出」という言葉に、私はとても温かなものが心の中に広がるのを感じました。

私たちを支えてくれるのは、このような素敵な思い出なのだろうな、と思いました。

(N.M.記)

5. 合鹿碗

K.K.先生とM.A.さんから、ルーカス先生へのおみやげをなにか選んでくるようにと命じられていた私は、ロゴセラピー講演会に出発する4日前の8月20日に買いに行くことを決めました。その日は、午後から、外来がん化学療法を受けている方へのPILテストの実施のために金沢市内に出かける予定があったからです。病院に調査に行き、その帰りにルーカス先生へのおみやげを見に行こうと思っていました。丁度、PILテストに協力してくださった方が、輪島塗職人(3代目、35年経験)の方でした。

その方は1年前に大腸がんが見つかりその時すでに肝臓への転移が見られ、現在、輪島から数時間かけてバスに揺られがん化学療法を受けに来られている人でした。

テストでは、「これまでの人生はもう楽しかったよ！！」「今後、この輪島塗の後継者を育てることが私の残された使命なんだ」と過去の人生が充実しており、今と未来へも大きな目的、希望を持って生き生きしている方でした。そして、「後、4年は生きなければ、後継者を育てられないナー」「でも、死は怖いんだ」など、とても正直に今の気持ちを語ってくださいました。

輪島塗に対する熱い思いを語る彼の姿を見て、私は、「来週ウィーンに行くので、今からおみやげを買いにいくところでした。久谷焼を持っていこうと思っていたのですが、あなたの話を聞いて、輪島塗を探しにいくことにしました。」と話しました。するとその方は、「自分の作品を是非持って行ってくれ」といわれました。

しかし、それを聞き、輪島塗は高価なものと知っていたので(安くとも3万円はする)「予算がないので、いいです。もう少し手頃なものを捜しに行きます」と話したのですが、「1万円でもいいよ。朱色のとても品のあるものが2個だけ残っているので一つ譲りたい。輪島塗は日本の誇りだから。是非、もって行ってくれ。きっと喜ぶよ」とのことでした。

PILテストの実施中も、しきりに輪島塗にかけた人生を熱く語ってくださり、きっとその方の作品には彼の魂がこもっていることが話してからよくわかりました。彼の創造価値の作品を、ルーカス先生へのおみやげにできることは、何かの巡り合わせなのだと思います。

彼から、作品が届いたとき、1枚のはがきが添えられていました。そのはがきに書かれていた内容は、次のとおりです。

「・・・輪島塗 漆器八職・・・

木地・下地・磨き・中塗・上塗・呂食・沈金・蒔絵

一つの物を八人の職人が、半年から1年かけてわが子のように育てて、作ります。

『うるし』は、日本人のルーツであり、魂です。そして、継続の象徴です。

歴史を捨てた民族ほど弱いものはありません。

そんな思いで、物造りに専念しています。 輪島・光峯」

(後日談)

そして、ウィーンから帰った2日後の9月3日(水)にPILテストの結果を持って、再度、彼に会いに行きました。

彼は、ルーカス先生がお椀を手にして喜んでいと聞きとてもうれしそうにされ、輪島塗への思いを次のように語ってくれました。

「自分は昔、武者小路実篤の本を読んで感動したが(その内容は)、『社会にどれだけ貢献できるかによってその人間の価値が決まる。お金ではない』というものだった。だから、自分は、学校の先生になって子どもたちに「これが日本人の心だよ」と教え、子どもたちに次の時代の日本を構築して欲しいという思いがあった。

輪島塗(という仕事)に3代続けて食べさせてもらえた。輪島塗(を作るという仕事で)食べていけなくなったら、最終的に輪島塗は消えていくのか、と思う。しかし、着物の友禅やお茶の世界でも良いものは脈々と生きている。芸術品、鑑賞品として輪島塗の価値を見ている人には売りにたくない。伝統的な和の心、輪島塗の良さを本当にわかってくれる人に輪島塗の茶碗でご飯を食べてもらえたら嬉しい。金銭的、技術的な問題はあるが、輪島塗は他の職人(八職)と協力しなければ作れない。切磋琢磨して、競争して、努力して、仕事を勝ち得ることが大切。そういう精神を今の日本人も持ってほしい。

(T.M.先生の仕事は)手間暇かかるが、社会に出て、周りから尊敬されたり、喜ばれたりする人間を、一人でもいいから作ってください。そうすれば、その生き方や考え方を持った人間が、ネズミ講のように増えていく。それは徒弟制度と似ていると思う。社会に出て初めて、兄弟子、親方が言っていたことが本当にわかるものだ。そういう人間を少なくともいいから育ててください。

病気になって初めて、やり残してきたことをやりたいと思うようになった。今はこの病院から少しの命をもらい、多くの人から励ましをもらい、もう少しやりたいことをしたいと思っている。そのやりたいこととは、兼六園の横にサロンを造ること。輪島塗を売るためではなく、いろいろな人が話し合いや議論が出来る場所を造りたい。」

輪島塗「合鹿椀」のホームページです

<http://www6.ocn.ne.jp/~sinde-1/index.html>

本当に、この方と出会えたこと、そして、その方の輪島塗の作品をルーカス先生におみやげとしてお渡しすることができてうれしく思っています。(T.M.記)